

緑爽会会報 No. 183

2022年12月26日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜《報告》〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

2022年 忘年会報告

日時：12月17日（土） 12時～14時半 場所：市ヶ谷 中華料理「西安」

参加者：21名（写真参照）

「忘年会」としては久しぶりであったが、暑気払いの経験を活かして上記の通り開催した。

定刻の12時には全員が揃い開会。代表の開会挨拶に続いて、新永年会員となられた松本元代表より、永年会員となられた感想や、年次晚餐会の様子などをお話いただいた。東京多摩支部創設10周年記念誌に寄稿された文章を資料として配布し、入会の経緯や、自然保護委員会担当理事としての仕事、更には緑爽会代表として、日本山岳会に貢献されてきた50年の歩みを語っていただいた。一言で50年と言うが、気の遠くなるような時間。学生時代に入会された方は70歳代で永年会員となる方もおられるが、人生100年時代とは言え、大変貴重なことであることに変わりはない。

お話の後、最年長の関塚会員から、世界の平和が早く訪れることと、緑爽会の今後ますますの発展を祈念してとの乾杯の発声をいただき、会食をスタートした。



（後列左から）石塚嘉一、小清水敏昌、藤下美穂子、栗城幸二、竹中彰、神崎忠男、南川金一
辻橋明子、松川征夫、吉田理一、夏原寿一、平野紀子、小林敏博、渡邊貞信
（前列左から）荒井正人、川嶋新太郎、梨羽時春、松本恒廣、関塚貞亨、川口章子、島田稔



お話される松本元代表

今年は3年振りで年次晩餐会が開催され、新永年会員は3年分の該当者が顕彰されることになった。当会では、松本恒廣、佐藤淳志、福田光子の3会員が晴れて永年会員となった。福田会員はコロナの状況を勘案して晩餐会を欠席された。忘年会は、その2週間後でもあり、残念ながら出席できない佐藤、福田両会員にはメッセージをお願いし、席上で披露させていただいた。

佐藤会員からは中学・高校と柔道部だったが、山岳部が桜の木の下でテントを張って楽しんでいるのを見て、山に惹かれたという逸話や、一貫して自然保護活動、特にイヌワシの生

息調査に関わっておられることを知らせていただいた。

福田会員からは、秋田支部として初めて女性会員として一緒に入会の故・北林嘉鶴子会員が100歳まで頑張っで永年会員になろうと話したことで、今二人分の意味を感じているとのこと。「50年会費を納めただけの会員に過ぎない」とのコメントがあったが、そこで南川会員に、永年会員制度の本来的な主旨について講釈をお願いした。永年会員になると以後の年会費が免除になるばかりでなく、年次晩餐会に招待されるので、それを楽しみにしている会員も多いが、数年前から招待を止めてしまった。これは制度発足の主旨をわかっていないことが原因であり、改めて、日本山岳会の歴史を知ることの大切さを学んだ。そういう中で、少なくとも緑爽会は、日本山岳会の伝統を重んじ、先人の思想を受け継いで行きたいものだと思う。



お元気な関塚会員

各テーブルでは直接会って話が出来る喜びが溢れ、笑顔が絶えなかったが、食事も一段落した頃から、お一人お一人に近況などをお話いただいた。最後に集合写真を撮ってお開きとなった。



近況を語る平野会員

また神崎会員にも出席いただき、やはりリアルでのこうした場が一番であると再認識した一時となった。来年はぜひとも総会を実施したいものである。

暑気払いの頃もコロナの新規感染者数が増えつつあった。今度も感染者数が増加し、第8波とも言われていたので、幹事で話し合っで開催可否を慎重に検討した結果、開催に踏み切った。身近にコロナ感染が忍び寄っていることもあり、開催後の心配がないではなかったが、遠方から越後支部の吉田会員、群馬支部の平野さんが来られ、ま



お話をされる吉田会員

(文：荒井正人、写真：石塚嘉一)

奥多摩の紅葉と歴史道の散策

石井 秀典

実施日：11月10日（木）

参加者：12名（写真参照）

奥多摩の紅葉散策は、昨年の日原鍾乳洞に続いての実施だ。今回も紅葉鑑賞しながら奥多摩の歴史文化に触れて歩くこととし、JR奥多摩駅と白丸駅の一駅区間の短い距離を散策した。



数馬の切通しで（後列左から）：富澤克禮、小清水敏昌、山川陽一、栗城幸二、小林敏博、石塚嘉一、石井秀典（前列左から）：川口章子、鳥橋祥子、田村佐喜子、田井具世、松川征夫

奥多摩駅前に集合。青空が広がり周辺の山肌は色付いて紅葉散策には良い日和だ。全員集合までに少々時間があつたので駅から徒歩5分の東京多摩支部の集会等施設「奥多摩BC（ベースキャンプ）」を見学。休憩や宿泊が可能であり奥多摩登山時に利用したいとの声があつた。

奥多摩駅近くの「奥氷川神社」の境内に全員が集合。案内を担当する石井が本日の行程と主な案内場所を地図で説明した。まずは奥氷川神社の案内。奥多摩第一の古社で「日本武尊（ヤマトタケルノミコ）が東征の折に創建」と伝わる。奥多摩が氷川郷と称される由来の神社で、大宮の氷川神社、所沢の中氷川神社とともに武蔵三氷川と呼ばれる。境内にある「三本杉」は鎌倉時代に植えられたと言われ、幹が3本に分かれて樹高49mは都内最大で東京都指定天然記念物である。

奥氷川神社を後に、散策に出発した。すぐ近くの「氷川溪谷」に行き、多摩川と日原川合流地に架かる吊り橋「氷川小橋」を渡る。ここから見る日原川流域の紅葉は素晴らしく、駅近くの穴場だ。散策路はもう一つの吊り橋「登計橋」を渡り、紅葉鑑賞しながら溪谷を 30 分程歩くと愛宕神社入口の車道に出た。

次の案内場所「奥多摩さかな養殖センター（海沢飼育池）」へは車道を海沢方面に向かい 20 分程歩く。途中の右手山腹に氷川発電所の太い鉄管が見えた。多摩川には小河内ダム（多摩川第 1 発電所）をはじめ水力発電所が 4 か所ある。氷川発電所はその一つで、山の上に貯水池があり落差 107 m の鉄管に水を流し発電している。貯水池の水は小河内ダム（奥多摩湖）から奥多摩の山中に作った長い導水管（約 9 km）を通じて取水しており、発電所の規模の大きさが分かる。

「奥多摩さかな養殖センター」の案内目的は、奥多摩名産の「奥多摩やまめ」を知って貰うことだ。奥多摩やまめとは、川魚ヤマメをバイオテクノロジーによる染色体操作で体長 2 倍の約 50 cm まで成長させたヤマメである。この事業は東京都農林水産財団が行い、2 か所の奥多摩さかな養殖センターで実施している。海沢飼育池の中尾所長から養殖方法等の説明を受けた。川魚ヤマメの人工受精卵を一度 28℃ のぬるま湯に浸けた後にふ化槽に戻すと染色体が三倍体になり、成長しても性的に成熟せずに卵や精子が作れない魚となる。タネなしスイカやブドウと同じで、卵巣や精巣に栄養が使われずに寿命が 2 年から 5 年まで延長されて大きく成長すること。陳列棚にある奥多摩やまめの剥製を見てその大きさと美しい容姿に驚いた。昭和 62 年から開発に取り組み平成 10 年に実用化に成功し「奥多摩やまめ」と命名した。

奥多摩やまめは大きくなるほど味が良くなり、ピンク色でしっとりとした身は刺身、寿司、ムニエルなど料理幅が広がり大変喜ばれている。しかし生産量にまだ限りがあり、奥多摩地域の特産品として指定の旅館、民宿、飲食店のみで食べることが出来る。値段はクロマグロ級とのことである。

野外の飼育池の奥多摩やまめ、イワナ、ヤマメ、ニジマスの養殖状況も見せて頂いた。今、全国的に河川の魚生息数が減少しており、海沢飼育池では稚魚の養殖をして漁協組合を通じて河川に放流する事業も行っている。中尾所長の熱心で面白い内容の説明に私達も聞き入ってしまい、予定時間を大幅に超過して養殖センターを後にした。すでに昼食時間になっており、天気が良いので養殖センター先の柿平橋近くの草原で食事をした。



次の案内場所「数馬の切通し」へは多摩川右岸の散策路に行く。数馬西トンネルを抜けて多摩川の流れを見下ろしながら歩くこと約 25 分、多摩川に架かる大きな数馬峡橋に到着。数馬峡は下流に白丸ダムが作られ溪谷美はなくなったが多摩川の景観は素晴らしい。明治時代

多摩川にかかる数馬峡橋からの溪谷美

には多くの著名人が溪谷の風光を賛美しており、橋の麓には日本画家の川合玉堂と奥田元宋の歌碑が建てられている。



数馬峡橋からは JR 白丸駅を右手に見送り、歴史の道「数馬の切通し」に向かって急坂の舗装道路を登る。途中で左の山道に入ると厳しい地形が現れて歴史を感じる道となる。元禄時代（1700 年頃）に旧氷川村から数馬の切通しを通り歩かれた道だ。古道を進むと岩場を開削した数馬の切通しが現れた。（←数馬切通しに行く）

江戸時代初頭までの奥多摩（旧氷川村）と白丸（旧古里村）間の通行は、急峻なゴンザス尾根を乗り越えねばなら

ず困難を極めていた。そのために旧氷川村以西地域の物流は檜原村の浅間尾根を經由して五日市へと流れた。元禄時代にその難題解消のために、ゴンザス尾根末端の固い岩盤に火を焚き水をかけ、ツルハシと石ノミで掘削し人馬が通れる道として切り開いたのが「数馬の切通し」である。この大事業を地元住民等数名が3年を費やして実施したとの説があり更に驚く。数馬の切通しの開通は旧氷川村以西の物流交流が広がり、青梅街道の発展にも大きく寄与することになった。奥多摩町の指定史跡である。

古道は数馬の切通しで終了しており、来た道に戻って行くと白丸集落に入る。JR 青梅線白丸駅北側の山に張り付いた小さな集落で、生活道は細い坂道ばかりで生活がいかに大変かが分かる。しかし白丸には日本画の巨匠川合玉堂が魅了されて太平洋戦争中の昭和19年から終戦までの間名主宅に疎開し、数々の和歌や俳句を詠んでいる。集落内には「川合玉堂が愛した散策コース」がありその道を歩いた。石畳の道、火の見やぐら、玉堂疎開先の立派な家などの歴史があり、玉堂が奥多摩槍と名付けた天地山（右写真奥）も眺望が出来た。登り坂の散策コースが終わり集落の鎮守神の元栖神社で休憩。境内のイチョウ巨樹が黄金に色付き、周囲の眺望も良く素晴らしい紅葉が見られた。



散策の進行が遅れていることから、次の案内場所「白丸ダム」は断念し次の機会に実施することで参加者の皆さんから承諾を得た。元栖神社から舗装道路を約20分歩いて白丸駅に到着。無人駅でホーム1本と数名が入る待合所があるのみの最近では珍しい駅だ。待合室で解散式を行い予定どおり15時23分の電車に乗る。拝島駅で下車し全員でご苦労さん会を実施した。

[参考・コースタイム]

集合「奥多摩駅」9:45→奥氷川神社(10:25)→氷川溪谷(10:30~11:00)→奥多摩さかな養殖センター(11:20~12:10)→昼食(12:30~13:05)→数馬峡橋(13:25)→数馬の切通し(13:35~13:55)→白丸集落(14:05~14:30)→白丸駅(14:50)

(写真：石井秀典、石塚嘉一＝次も)

紅葉の奥多摩散策

松川 征夫

奥深い山々が彩る11月10日奥多摩の紅葉を楽しみながら白丸駅周辺の史跡を巡るハイキングである。

参加者は12名(女性4名、男性8名)で、リーダーには石井秀典さん、サブリーダーには富澤克禮さんという強力なお二人におんぶにだっこの気持ちとなったのは私一人ではなさそうだ。遠くからは長野県松本市からT女史も参加された。

奥多摩駅前に集合しリーダーから本日の予定を伺う。天候は申し分ない晴天。

早速奥氷川神社へ、杉の大木と綺麗に黄葉した银杏の大木に感激しながら氷川溪谷沿いに歩く、見事な紅葉に思わず「きれい！」の声。街道に出ると木材を活用した綺麗なトイレがあった。説明では全国で一番きれいなトイレを目指し、町を挙げて取り組んでいるらしい。ハイカーとしては嬉しい限り。また奥多摩はワサビが特産だ。観光協会のパンフにも「山城屋」が記されていた。

歩くこと 40 分くらいで「奥多摩さかな養殖センター（海沢飼育池）」へ到着。センターの存在は以前から知っていたが事前に予約を入れ初めての見学が実現した。30 分講義を受けその後現場見学という行程であった。センターを管理しているのは（公財）東京都農林水産振興財団である。

主な事業は、1. 農業振興 2. 畜産・水産資源拡大 3. 試験研究 4. 森林循環と林業振興と幅広く活動されている。

この海沢飼育池は、「水産資源拡大」の中で、種苗生産・配付事業及び研究事業ということであ



飼育池で説明を受ける

った。飼育されているマス類は、「ヤマメ」「ニジマス」「ニッコウイワナ」「奥多摩やまめ」の四種類。これらの種苗（卵や稚魚）を生産すること及び繁殖漁協（繁殖用）への配布が主な事業である。イワナは日原川に生息し秋川にはいないとの説明があった。また「奥多摩やまめ」であるがヤマメの全雌三倍体魚のことで東京都では「奥多摩やまめ」の名で呼ばれている。通常ヤマメに比べて寿命が長く大型化するので、刺身やムニエルなどの料理で味わうことができるそうだ。また燻製や干物などの加工品も商品化されている。短時間だったが貴重なお話を伺う事ができた。

昼食後は紅葉が映える数馬峡遊歩道（景勝地）を散策。切り立った断崖に足が竦む。この溪谷は氷川～白丸間の交通の難所。はじめゴンザス尾根の根岩（ネーヤ）越えで往来していたが、江戸中期に硬い岩塊を砕いて切り通しを造り、溪谷沿いに街道の真上あたりを海沢に出る小道を造った。それが奥多摩町の史跡「数馬の切通し」である。元禄のころに開かれ、その後の改修によって奥地との物流交流が可能になったようだ。砕き方は岩盤に火を焚いて水をかけツルハシ等で切り開いたもので近くには宝暦年間の供養碑があった。先人のご苦勞を肌で感じ身の引き締まる想いであった。

最後は白丸集落内の散策だ。日本画家川合玉堂がこよなく愛した散歩道で綺麗に彩られた溪谷を見下ろす散策路であり、また川合玉堂が白丸に 1 年間疎開されていた住居を拝見し青梅線で一番寂しいと言われている白丸駅に無事到着。駅内にて解散ミーティングを開いた。リーダーからは、今回白丸ダムを見学できなかったので来年に再度計画したいとの話を伺いお開きとなった。

今回は天候にも恵まれまた紅葉の始まりでもあり平日にしては多くのハイカーで電車も混んでいた。当然寄り道をして全員で懇親を深め、心地酔い？気持ちで帰路に着いた。

今回企画から実施までリーダー、サブリーダーお二人に大変お世話になりました。

お礼申し上げます。

奥多摩～白丸駅ハイキング

栗城 幸二

会山行は、前回 9/27 の「要害山」に続き、二度目の参加でした。

奥多摩駅には何回も来ておりますが、山に登らずに駅界隈を歩くのは初めてのことで、いつもとは少し違う感じで電車に乗込みました。

10 時過ぎに奥多摩駅前を出発。まずは「奥多摩 BC」見学の後、都指定天然記念物の「三本杉（樹齢 700 年＜伝承による＞）」のある奥氷川神社の境内で全員がそろって、スタート（次頁写真）。

直ぐに日原川と多摩川の合流点の上にかかる吊り橋を渡る。ここは溪谷の美しさと楓の紅葉が見事だった。そのまま多摩川の崖に作られた小道を下流に向かって歩くが、この様な深山を思わせる雰囲気からほんの少し歩いただけで味わえるとは少々驚きでした。



青梅街道に出たあと、「奥多摩さかな養殖センター」を見学。海に戻るサケマス孵化場は見たことはあったが、山奥のこのような内水面の施設は初めて。場長の熱心な説明を受けた後、現場に行く。幾つかの大きなプールがあり、たくさんの魚が泳いでいる。イワナ・ヤマメ・ニジマスとのこと。特に説明があったのは「奥多摩特産三倍体ヤマメ」だった。フライフィッシングで溪流を釣り歩いていた頃に、いわゆる「尺ヤマメ」を釣ったことがあったが、ここでは優に“尺をしのぐ魚”が群れを成してた。これを「奥多摩やまめ」と言うのだそうで、全く初めて聞く名前だった。卵を28度のお湯に15分浸けて元の水槽に戻すだけで“染色体三倍体”のヤマメが生まれ、数年生きて大きくなるとのこと。通常ヤマメ(二倍体)が最大でも30cm弱に対して50cm超えになり、大きく成るほど味も更に美味しくなるとのことでした。とても興味深く面白い話でした



※現状では需要に供給が間に合わず、地元と一部の契約店でしか食べられないとのこと、残念でした。

奥多摩さかな養殖センターHPより

この後、発電所下の海沢付近でランチタイムとした。「古道・数馬の切通し」では江戸中期頃からの峠超えの辛苦を偲びながら歩く。白丸集落の「元栖神社」では小林さんから鳥居についての説明があり、鳥居にもそれぞれ形とその謂れがあることを学び、白丸駅まで楽しい散策が出来ました。石井リーダーはじめ皆さま、一日楽しく過ごせました。ありがとうございました。

《10月行事報告》 講演会「関東地方を取り囲む峠を歩く」

実施日：10月22日(土) 14時～ 武蔵境のスカイルーム1

参加者：26名(緑爽会会員14名 その他日本山岳会会員9名 一般参加者3名)

恒例となった秋の講演会。今年は120周年記念事業として全国山岳古道調査プロジェクトも始まっていることもあり、「峠」をテーマとして、埼玉県立川の博物館の研究交流部長、大久根茂氏に標記の演題でお話をいただいた。実は8月の山の日に関東支部でも主に「秩父の峠」を中心に講演を行っている大久根氏であるが、今回は対象を「関東地方を取り囲む峠」に広げて話していただくこととした。小林副代表の挨拶・講師紹介の後、講演は、各地の峠など得意のカメラで撮影したものをパワーポイントで写しながら始まった。次葉の表にある13の峠を用意していただいたが、全体の時間を勘案する中で、参加者の希望を聞いて7つの峠に絞って話していただいた。

まず最初に手が挙がったのは「清水峠」で、大久根氏はちょっと想像と違ったか、驚いた様子であった。

下表（当日配付資料）は、峠がどの街道にあり、その峠の一方の起点となる集落（昔で言えば宿場）と反対側の集落がどこであるか、その峠は現在どうなっているかをまとめたものである。「現在」の項でカッコ書きとなっている峠は、今は以前と違う所を通っているか、その下をトンネルが通っている峠という意味である。

清水峠に関しては谷川岳の馬蹄形縦走で通った事のある方はいるかもしれないが、群馬側から新潟側へ峠越えする人はあまりいないと思われる。大久根氏も峠から清水へのルートは歩いていないようだ。この峠は、小さな集落の名前がついているが、それだけではなく「清水街道」「清水トンネル」にもついている。それは群馬・新潟を結ぶ最短距離であるから。清水峠は結構厳しい上り下りがある。明治時代に荷車程度が通れるような道を政府が作ったが、豪雪地帯のため、僅か1、2年で廃道同然になってしまった歴史がある。ところどころには石垣も残っていて、今はハイキングコースとして歩けるが、残雪期には注意が必要とのことだ。

次に碓氷峠のリクエストがあった。群馬側の坂本宿からは急な登りだが、長野側の軽井沢へは緩やかな下りである。ここで「遠足（とおあし）」との説明があった。これは安中の殿様が、安政の頃に、武士の鍛錬のために峠まで走らせたというもので、マラソンの発祥となったという説もある。今でも5月に、地元では「安政遠足～侍マラソン大会」が行われているという。



講師の大久根茂氏

峠名	街道名	標高	場所	麓の宿場	現在
箱根峠	東海道	846m	神奈川県－静岡県	箱根－三島	国道1号
足柄峠	旧東海道 足柄古道	759m	神奈川県－静岡県	矢倉沢－竹之下	神奈川県道78号 静岡県道365号
笹子峠	甲州街道	1096m	山梨県	黒野田－駒飼	(国道20号)
大菩薩峠	青梅街道 甲州裏街道	1897m	山梨県	氷川－塩山	(国道411号)
雁坂峠	秩父甲州往還 甲州裏街道	2070m	埼玉県－山梨県	贄川－川浦	(国道140号)
十文字峠	秩父信州往還	1962m	埼玉県－長野県	贄川－梓山	
十石峠	十石街道	1351m	群馬県－長野県	白井－高野町	国道299号 国道462号
碓氷峠	中山道	1200m	群馬県－長野県	坂本－軽井沢	(国道18号)
三国峠	三国街道	1224m	群馬県－新潟県	永井－浅貝	(国道17号)
清水峠	清水街道	1448m	群馬県－新潟県	湯桧曾－清水	国道291号(廃道)
三平峠 沼山峠	会津沼田街道	1762m 1785m	群馬県－福島県	戸倉－檜枝岐	
山王峠	会津西街道	903m	栃木県－福島県	横川－糸沢	(国道121号)

この峠で知られていることは、峠が群馬・長野の県境を成していて、そこに熊野神社（群馬県）と熊野皇大神社（長野県）が並んでいることだ。神社の真ん中が県境なのである。中山道であり、昔は関所もあった。そこにある狛犬は、室町時代のものとされ、長野県最古の狛犬だと言われている。また、ご神木「しなの木」の大木がある。皮を剥いで織物を作ったが、それが多いので、「信濃」の語源となったとも言われる（諸説あり）。

大久根氏の峠越え、峠歩きは、山登りには違いないが、ピークを目指すものではなく、戦いのため、物資を運ぶためなどの用途で使われた峠道を訪ね、麓の集落も含めて民俗学的な視点から歴史を訪ねることにある。登山者は、登山口が集落の奥にあると集落は素通りしてしまうが、そこに歴史的な建造物や石碑などがあることが多い。それらを自分で確かめて、当時の風景や生活に想いを馳せるのが峠歩きなのだと言えようか。

次に要望があったのは、おなじみの大菩薩峠で、県境ではなく山梨県下の峠であるが、多くは塩山側から登られる。お話は小菅から歩いた時のことであった。登山口に白糸の滝があるとのことだが、あまり知られていないのではないか。また途中「ニワタシバ」（荷渡場）と言って、物資を交換するエリアがあったという。



講演会の様子

続いて十文字峠の声が上がったが、これは主要街道ではないので（長野からは秩父往還、秩父からは信濃往還と言われている）、何度も行っているがシャクナゲで有名ということで写真を見るにとどめられた。（季刊『山の本』で「峠の履歴書」という連載を執筆されている大久根氏は9月発行の秋号で十文字峠を取り上げている）

次の要望がないことから、大久根氏より箱根峠に行きましょうということになった。箱根峠と言えば多くの方が芦ノ湖畔の関所などには観光で行っていると思われるし、石畳の道を辿った人も多いと思う。しかし小田原（箱根町）から三島大社まで歩いた人となると少ないだろう。箱根の伝統工芸、寄木細工で有名な畑宿、石畳に杉並木と言えばなじみもあるが、では途中の坂にはいろいろ名前がついているそうで「女ころがしの坂」の表示を見たことのある人はグッと少ないに違いない。静岡県側にも山中城址があるが、それもあまり知られていない。

続いて三国峠を取り上げられた。清水峠と同様、群馬・新潟の県境で、猿ヶ京温泉がある三国街道である。長岡藩士が越えた峠で多くの著名人が通っている。群馬側の麓は永井宿。峠には三国権現があり、その御神水は、こんなおいしい水は飲んだことが無いというくらい、美味かったとのことだ。その後、三平峠、沼山峠について触れられた。

大久根氏が語るには、峠道というのは生活道、物流の道でもあったことから、傾斜が緩やかで、歩きやすく作られていること、自然に対して優しい場所をうまく通っているという。そして国境とは文化の境でもあると。

よく秩父の暗い森の中を登って峠に出ると、明るく開けた甲州の展望が目に入るなどと言われるが、それはある意味で、峠は別世界への入り口で、言葉や文化の違う世界を連想させる。山に登るときにどうしても通らねばならない峠もあるが、ピークのついでではなく、峠（越え）そのものを目的とした歩き方も面白いと思う。豊かな峠歩きのヒントを学んだ講演会となった。

（文：荒井正人、写真撮影：石塚嘉一）

我が家の階段

芳賀 孝郎

私の家に入るには 20 段の階段を上らなければならない。十数年前、山仲間の山崎クンケンさん（第一次、二次マナスル隊員）が我が家を訪ねて来た。その時、「この階段は何時まで上ることが出来るだろうか」と言っていて、手すりにつかまりながら上がってきたことがあった。

私は近所の散歩に時々出かける。私の住んでいる宮の森は、1950 年頃まで乳牛を放牧された馬場牧場があった。そこには大きな赤い屋根のサイロも立っていた。ナマコ山一帯が牧場で、冬になるとこのナマコ山付近は絶好のスキー場となった。この山の麓には北大のスキー部の合宿場があり、宮の森北大ジャンプ場もあった。スキーばかりではなく、この付近にはウサギを良く見かけ、追いかけてたりした。新雪の上に多くのウサギの足跡があった。現在ウサギは全く見かけない。見かけるのはエゾリスとキタキツネである。



2 月の階段

我が家を除いて、宮の森は素敵な住宅街と変貌した。

私はこの家並みを見ながら散歩するのが好きである。家のデザインは、時代によりさまざま変化している。きれいな庭のある家、庭の花や木々を見るのも楽しい。庭のない土地一杯に建てた家、景色を見たくないのか、人から見られるのが嫌のか窓が少ない家、窓がない家などさまざまである。

勝手にいろいろと想像しながらの散歩をして家の前に立つ。その前には 20 段の階段がある。階段を一步一步上がり 20 段で散歩は終了する。

私の家の近くに 311m の山がある。その名前は三角山で一等三角点がある。この山は名前の通り三角である。1950 年代までスキー場であった。三角山は急斜面である。私は高校の頃インターハイ出場を目標に良く練習した。全日本スキー選手権大会回転競技も行われた。1952 年大会では日本人初のオリンピック回転競技でメダリストになった猪谷千春選手も参加していた。

その後、私が留守にしていた時代（1953～1966 年）に、北海道神宮が三角山を売却して私有地となった。三角山は、その後碎石場となり、三角の南側が大きく削られた。地元の町内会の宮の森明和会の人たちの反対運動で碎石が中止され、三角山は札幌市の所有地となった。しかしその碎石の痕跡は今も如実に残っている。

「三角山を守る会」が立ち上がり、碎石場を元に戻す運動も始まった。私はその会の会員である。私は、復元する費用を掛けるのではなく、時間を掛け、そのまま自然に委ねた方が良いと考えている。碎石場の斜面は、少しずつ白樺や柳、その他の木々が茂り始めた。毎年、確実に少しずつ復元している。三角山の碎石場は、札幌の建設ラッシュの時、自然破壊をした時代があったことを示す痕跡である。碎石場を残すことが歴史的、教育的に大事と思っている。

私は、四季を通して春夏秋冬の三角山を登っている。その際には、必ず碎石場跡の前を登っている。碎石場をよく見ると、毎年自然が回復しており、その変化を観察している。

3 月 11 日は高さ 311m の三角山の日と私は勝手に決めて毎年登っている。偶然にもこの日は東北大震災の日である。山頂より南西の被災地の方向に向かって追悼の祈りをしている。

頂上から見ると、石狩平野へ向かって札幌市街は拡大している。200 万都市として展開されてい

るのを実感できる。75年前、中学生の時見た札幌は20万都市であった。今日のその発展ぶりに驚く。且つ最近ではビルの高さが高くなり、30階、40階の高層ビルが立ち並ぶようになった。

三角山からの尾根路を下り、大倉山へ向かう。この尾根路は、四季により風景が変わり、小さなアップダウンがあり気持ちが良い。秋の落葉の季節になるとこの路は落ち葉の絨毯となる。大倉山を過ぎて小別沢へ下る。今の散策路は札幌が大きく発展しても昔と変わらないのが嬉しい。

小別沢から一般道路に出て、少し下ると昔は山林であった所が住宅街と変化した。急な斜面に家が建っている。冬場の雪を心配しながら我が家に向かう。

2時間半の登山を終えて我が家の階段の前に立つ。

最後の20段の階段を上るのはきつい。ドッコイショと声を掛けながらゆっくり上る。階段を上り終わると登山は終了である。87歳で登山が出来ることで神に感謝する。

我が家の20段の階段は、私の一生、死ぬまで上れる階段であって欲しい。



10月の階段

2021年5月記（写真：芳賀さん提供）

全国山の日協議会～通信員レポート

吉田 理一

「山の日」は山の恵みに感謝するとともに、美しく豊かな自然を守り、次の世代に引き継ぐことを銘記する日である。

2014年5月「山の日」制定法案成立

2016年4月(一財)全国山の日協議会設立

2016年8月『第1回「山の日」記念全国大会 in 上高地』開催

(一財)全国山の日協議会は国民の祝日となった「山の日」制定の趣旨をより広く国民に理解してもらうための活動を行うため設立された団体である。全国山の日協議会ではJACの各支部をネットワークでつなぎ、山に関する情報を共有しHPで全国に発信する事を計画している。

私の居住している新潟県は面積が広く何かを分担して担当するときは、上越地区・中越地区・下越地区の3地域に分けて作業を進めるのが通常である。

今回の山に関する情報のネットワーク構築にあたり、越後支部では従来の3地区に加えて飯豊連峰地区と魚沼奥只見・尾瀬地区に通信員を置く5地区5人体制が適切との判断に至った。

2021年11月越後支部桐生恒治支部長から私に「魚沼地区担当通信員」の依頼があり推薦していただいた。膝関節症を発症するまでは「越後駒ヶ岳駒の小屋管理人」や「尾瀬ガイド協会認定ガイド」「奥只見郷ネイチャーガイド」をしていた経験もあり私でも協力できると思い引き受けた。

2021年11月13日、JACの各支部との打ち合わせのトップを切って越後支部と全国山の日協議会役員とのZoomによる会議が実施された。

全国山の日協議会からは梶正彦理事長(JAC会員番号6676番)とデジタル担当三木健一理事、越後支部からは桐生支部長はじめ各地区通信員が参加してデータのアップロードの具体的な手順の確認を行った。私がアップした通信員レポートは全国山の日協議会のHPで公開されている。

2022年2月5日、梶理事長から直々にメールを戴き驚いた。「雪を楽しむ」と題し、国道252号沿いの魚沼市堀之内地区に町の芸術家が制作した「雪像」を数回にわたりレポートした事に対する感想だった。

雪像はキティちゃん、ドラえもん、ミッキーマウス、ドラミちゃん、スヌーピー等素晴らしい出来栄である。私のブログ <http://ameblo.jp/6682754> でも紹介していて、わざわざ現地まで実物を見に行ったブロ友もいる。

山の日通信員レポートの取り扱う分野は多岐にわたり話題に事欠くことは無い。各地からの通信員レポートを見ても「山に関する書物」は一件もレポートされていない。そこで新しい切り口として、手始めに緑爽会会員の中村好至著画文集『心に映る山』（2014年白山書房刊）を2022年9月3日にレポートして反応を見ているところである。

新潟県三条市下田の「ヒメサユリ」をはじめ素晴らしい花のレポートをアップしている梅本知榮子賛助会員(6389番)はどのような方か調べてみたら、1970年に田部井淳子さんらとアンナプルナ3峰に遠征した隊の一員だったという事が分かった。（『日本女性登山史』1992年 大月書店刊）

緑爽会会報179号(2022年4月号)の近況報告で夏原寿一氏が梅本さんについて詳しく紹介されている。アルパインフォトクラブの発起人であるとの事、写真の出来栄が一味違うのも納得。

更に二重に驚いたのは元緑爽会会員だったとの事で、私が夏原氏に梅本さんについての情報を依頼した訳ではないのに偶然である。人の縁とは不思議なものである。

～～《予告など》～～

1月山行:千駄ヶ谷富士と文京区内富士塚巡り

富士塚としては23区内最古といわれる、渋谷区唯一の富士塚・千駄ヶ谷富士と文京区内の富士塚3つなどを巡ります。行程は会報182号の《案内など》でご確認ください。

実施日:2023年1月20日(金)

集合:JR千駄ヶ谷駅改札口外に10時(歩行時間:休憩込み約5時間、解散:駒込駅)



※富士塚に登拝される方は、滑らない靴でご参加ください。

※ご自宅から集合場所・解散場所からご自宅への交通費以外に千駄ヶ谷駅⇒東京メトロ護国寺駅310円、小石川植物園入場料500円(昼食休憩と植物観察を予定)、計810円が必要です。

担当:CL 小林敏博、SL 石塚嘉一

申込:1月16日(月)までに小林へ

2月 芳賀孝郎会員のお話を聞く会 2月24日(金)午後を予定

※アルパインスケッチクラブの「山好きの山の絵展」開催に合わせて、芳賀会員が東京に来られることになりましたので、この機会に設定しています。詳細は追って、メール・ハガキでご連絡致します。

3月山行「鐘撞堂山」(標高330m)埼玉県寄居駅北方の山です。

日時:2023年3月15日(水) ※詳細は2月発行の会報で案内します。

2月、3月の行事について、ぜひスケジュールに入れておいていただきたいと思います。

―― 編集後記 ―――

コロナの重圧を感じながら年越しするのも三回目です。忘年会では、お元気な関塚さんにパワーをいただいた気がします。インフルもあります。お身体に気をつけられて、良いお年をお迎えください。(荒井正人)

今年も残りわずか。コロナ禍でもいくつもの行事を催すことができ、また充実した会報を発行できました。

皆様に感謝申し上げます。来年はより良い年となるよう願っています。(小林敏博)

次号予告<2月27日発行の主な内容>

1月富士塚巡り報告、投稿・寄稿など(新連載が始まります)